

< 論 文 >

アスペクト性を認識させる文法指導

中 川 直 志

1. はじめに

中川 (2012) において筆者は、現在完了形が表すアスペクト性を have 自体が持つアスペクト性に還元させる指導法について考察した。have は、一般には非推移的状态を表す (荒木他 (1977 : 234)) と言われるが、少なくとも語用論的に、現在の状況が過去において生じたことを含意することができる。Murphy (2009 : 32) の次の記述はこれを支持するものと言えよう。

- (1) Have and have got (for possession, relationships, illness, etc.)

You can use have got or have (without got). There is no difference in meaning:

- They have a new car. or They've got a new car.
- Nancy has two sisters. or Nancy has got two sisters.
- I have a headache. or I've got a headache.

have と have got が同じ意味である、つまり、have が got も含意する可能性を (1) は明示している。have の時間的指示に幅がある

ことは母語話者にも明確に認識されているといえよう。(4節参照) 過去分詞が(2)に示すように必ずしも過去を意味すると言い切れないことは、「have + 過去分詞」という形式においても過去分詞を一概に過去と決めつけることの指導上の危険性を示唆している。

(2) John is interested in music.

(2)はJohnが現在において音楽に興味を持っていることしか意味しないので、(2)における過去分詞を過去に関連付けることには無理がある。

上記の議論のもう一つの重要な示唆は、haveに限らず動詞の語彙が持つアスペクト性(語彙的アスペクト)について認識させる必要性である。本稿においては、本動詞固有のアスペクト性と文全体のアスペクト性の関係や単純形の基本的アスペクト性を観察することによって、学校教育においてテンスとアスペクトを区別して指導する必要性、動詞個々の語彙的アスペクト性に関心を向けさせる必要性、そして、語彙的アスペクトと文法的アスペクトを区別する必要性について考察する。

本稿の構成は次の通りである。2節においては、テンスとアスペクト、文法的アスペクトと語彙的アスペクトの区別を確認した上で、これまで必ずしも重視されて来たとは言えない語彙的アスペクトに注意を向ける必要性を示唆する。3節においてはアスペクトを認識させる指導上の工夫について考察する。4節においては、単純形のアスペクト的解釈について陥りやすい誤解について検証し、単純現在形の「習慣」としての解釈を明確に認識させる対比について考察する。5節においては、アスペクトが文構造上どのように位置付けられるか考察し、アスペクトとテンスの関係やアスペクト内部の要

素間の関係が、構成素統御と呼ばれる関係によって規定され、それにより、意味上の限定関係と語順上の関係が関連付けられる形で予測可能となることを観察する。6節は結論である。

2. テンスとアスペクトを区別する必要性

田中 (2015) は、文法指導においてテンスとアスペクトを区別することの重要性を指摘し、その下位分類を次のように図示している。

(3)

テンス	アスペクト			
現在	単純	進行	完了	完了進行
過去	単純	進行	完了	完了進行

その上で、田中 (2015) は過去単純形、現在完了形、過去完了形のアスペクト性について詳しく説明しており、そのこと自体は有為である。その一方において、(3)におけるアスペクトの下位分類は原形、進行形、完了形、完了進行形という「文法的アスペクト」におよそ対応していると考えられ、本動詞が本来有している語彙的アスペクト性およびその下位分類には焦点が当てられていない。個々の本動詞が有する語彙的アスペクト性は副詞類との共起などにおいて決定的な役割を果たす。

- (4) a. *John walked in an hour.
 b. John walked for an hour.

walk は動作が完了したことを意味しないので、「1時間で (歩き終えた)」を意味する副詞句とは共起できないが、「1時間 (歩き続け

た)』を意味する副詞句とは共起できる。

個々の本動詞が持つ語彙的アスペクト性については一定の説得力ある分類が提案されてきている。一例として、西山 (2002) に従い、本動詞のアスペクトの古典的研究である Vendler (1967) の分類について概観しよう。Vendler (1967) は本動詞固有のアスペクト性を (5) に示す 4 種類に下位分類した。

- (5) a. 状態 (state) : 継続性があり、終点がなく、静的。
know the answer, be tall
- b. 動作 (activity) : 継続性があり、終点がなく、動的。
walk, dance
- c. 完成 (accomplishment) : 継続性があり、終点があり、動的。
build a house, draw a circle
- d. 達成 (achievement) : 継続性がなく、終点があり、動的。
reach the summer, notice a sign

(西山 (2002 : 31))

分類の基準は次の通りである。

- (6) a. 終点の有無
- b. 継続性
- c. 進行形との共起可能性
- d. 意図性

個々の基準がどのように機能するか簡単に観察しよう。(6a) の終点の有無について言えば、状態 ((7a)) と動作 ((7b)) が終点を

持たず、完成 ((7c)) と達成 ((7d)) が終点を持つ。

- (7) a. *John knew the answer in an hour.
 b. *John walked in an hour.
 c. John built a house in an hour.
 d. John reached a summit in an hour.

(西山 (2002 : 32))

「知っている」という状態や、「歩く」という動作そのものに終わりはない(「歩き始める」という意味の場合は終点がある。)ので、「1時間で」という述部動詞に完了の意味を要求する副詞句と walk は共起不可能である。その一方で、「家を建てる」という行為や「頂上に到達する」という行為には終点があるので、行為の完了を要求する動詞との共起に問題はない。((7c) は建築作業を続けるという意味では共起不可能。)

継続性は達成とそれ以外のアスペクトを区別する。

- (8) a. John knew the answer for an hour.
 b. John walked for an hour.
 c. John built a house for an hour.
 d. *John reached a summit for an hour.

(西山 (2002 : 33))

for an hour は継続性を持つ述語と共起できるので、状態、動作、完成とは共起可能だが、達成とは共起不可能である。((8c) は家を建てる作業を継続したという意味において共起可能である。)

進行形での生起可能性は状態とそれ以外のアスペクトを区別する。

- (9) a. *John was knowing the answer.
 b. John was walking.
 c. John was building a house.
 d. John was reaching the summit.

(西山 (2002 : 35))

状態では進行形が不可能である ((9a)) のに対して、動作 ((9b))、完成 ((9c))、達成 ((9d)) では進行形が可能である。

意図性は状態と動作ならびに完成を区別する (西山 (2002) は達成について、それが一瞬のため意図性が明確でない場合が多く、本議論から除外している。)

- (10) a. *Know the answer!
 b. Walk!
 c. Build a house!

(西山 (2002 : 36))

状態では命令形が不可能である ((10a)) のに対して、動作 ((10b))、完成 ((10c)) では可能である。

Vendler (1967) の分類には対案も多く提案されている (cf. 三原 (1997, 2004)) が、いずれにしても本動詞の語彙的アスペクトに対する体系的説明はある程度可能であろう。ただし、本動詞のアスペクトの下位分類を覚えさせる以上に重要なことは、語彙的アスペクトと文法的アスペクトが別個のものとして認識され、文が表す事象のアスペクトが、語彙的アスペクトと文法的アスペクト、さらには目的語や副詞句との相互作用によって決定されるということを知識させることである。次節においては、この相互作用を簡単に認識させる方策について考察する。

3. アスペクトを認識させるヒント

本節においては、アスペクト性、そして文法的アスペクトと語彙的アスペクトを認識させる一方法について提案したい。まず次のような文を提示する。

(11) *John walked in an hour. (= (4a))

まず、(11) を walked の形態を変えることなく文法的にする方法を考える。一つの答えは (12) である。

(12) John walked for an hour. (= (4b))

ここで walk のアスペクト性 (終点がない) について説明してもよいが、これだけでは前置詞の語感が掴めていない生徒には理解が難しい。そこで、(13) を別解として用意する。

(13) John walked to the station in an hour.

(13) は、副詞句 (to the station) を加えることによって、(11) が表す事象に終点加わったことを明示している。文のアスペクト性に影響を及ぼす要素は副詞だけではない。

(14) a. John pushed the cart to the town in an hour.

b. *John pushed carts to the town in an hour.

c. John pushed the/four carts to the town in an hour.

(西山 (2002 : 37))

(14) は目的語の数の限定性がアスペクト性を変化させることを示している。目的語の数が定冠詞や数詞によって限定されれば、文全体が表す事象に終点が現れるが、(14b) のように目的語の数が限定されなければ、事象全体に終点を見出すことはできず、in an hour との共起が非文法性を生じる。(11) と (13) の比較や (14a-c) の比較を通じて、本動詞の語彙的アスペクトの存在だけでなく、文が全体として表す事象のアスペクト性が動詞要素に限らず様々な要素によって規定されることを示したい。

本動詞に語彙的アスペクト性があることが理解できた上で文法的アスペクトの導入を図ると、それが本動詞の語彙的アスペクトとは独立した装置であることがよく理解できよう。現在完了のアスペクト性のより本質的な理解については中川 (2012) に譲るとして、(12) と (15) を対比させるのも、これまでの指導の流れを踏まえれば有為であろう。

(15) John has walked for an hour.

(12) が過去のある時点で 1 時間歩いたことを意味するのに対し、(15) は現時点で 1 時間歩いたことを意味する。(12) が yesterday や last week のような副詞と共起できるのに対し、(15) が today や this morning のような副詞と共起できるのを示すのも理解を助けられる。

(16) a. John walked for an hour yesterday/last week.

b. John has walked for an hour today/this morning.

本節においては、文全体が表わす事象のアスペクト性が、本動詞の語彙的アスペクト、文法的アスペクト、そして副詞などの要素の相互作用によって決定されることを観察しながら、本動詞の語彙的アスペクト性や文法的アスペクト性をそれぞれ独立的に理解する指導法について考察した。とりわけ重要なのは本動詞の語彙的アスペクトをテンスとは区別すべきものとして理解させることである。(12) と (15) のような現在完了形と過去形の対比自体は何ら珍しいことではないが、動詞自身のアスペクト性を明確に認識することによって、その本質的理解が深まることが期待される。

4. 単純形のアスペクト

これまで、アスペクトには語彙的アスペクトと文法的アスペクトがあり、本動詞の語彙的アスペクトと完了形や副詞句の相互作用によって、文全体のアスペクト性がどのように変化することを観察した。しかし改めて考えると、単純形（現在形、過去形）も一つの文法装置であることを踏まえれば、動詞の語彙とは別に、単純形という文法装置が有するアスペクト性はないのかという疑問があってもおかしくない。また、学校文法の初期段階で登場する単純形の指導についても再考察の余地があるようにも思われる。本節においては単純現在形のアスペクト的解釈について観察するとともに、そのあべき指導方法について考察する。

4.1. 単純現在形の訳とその時間的指示

単純形のアスペクト的解釈について学習するにあたり、現在形に付される典型的な和訳はその障害となる可能性がある。次の文を例に考えてみよう。

(17) I play tennis.

(17) の動詞は現在形であり、「私はテニスをします」という訳を刷り込まれるのだが、「私はテニスをします」いう発言には一般的に2通りの解釈がある。一つは、「これから実際にテニスをする」という解釈であり、もう一つは「趣味はテニスである」というような解釈である。そして現実には、話者が発話時にテニスラケットでも持っていない限り後者の解釈が優先される。つまり、現在形においては、状態動詞を除き、一般に「習慣」というアスペクト的解釈が優先されるのである。

その一方で、「これから実際にテニスをする」の解釈にふさわしい英文はどのようになるのであろうか。筆者が学生を相手に試したところ、大半が事実上未来を表すと考え、次のように答える。

(18) I will play tennis.

この答え自体は間違っていない。Murphy (2009 : 40) が示すように、「これから実際にテニスをする」の解釈において少なくとも現在形はふさわしくない。

(19) We use I'll (= I will) when we decide to do something at the time of speaking.

- ・ Oh, I left the door open. I'll go and shut it.
- ・ "What would you like to drink?" "I'll have some orange juice, please."
- ・ "Did you call Julie?" "Oh no, I forgot. I'll call her now." You cannot use the simple present (I do/I go,

etc.) in these sentences:

- I'll go and shut the door. (not I go and shut)

しかし、(19) に示された will の用法は意思未来である。「これから実際にテニスをする」にも2通りの解釈があり、意思と同様に一般的な解釈として「午後からテニスをする事になっている」というような予定の解釈がある。(20) が示すように、そのような場合は will は必ずしもふさわしくない。will が用いられる一般的な環境は (21) の通りである。

(20) Do not use will to talk about what you have already decided or arranged to do.

- I'm going on vacation next Saturday. (not I'll go)
- Are you working tomorrow? (not Will you work)

(Murphy (2009 : 40))

(21) We often use will in these situations

Offering to do something

- That bag looks heavy. I'll help you with it. (not I help)

Agreeing to do something

- A : Can you give Tim this book?
B : Sure, I'll give it to him when I see him this afternoon.

Promising to do something

- Thanks for lending me the money. I'll pay you back on Friday.
- I won't tell anyone what happened. I promise.

Asking somebody to do something (Will you ...?)

- Will you please be quiet? I'm trying to concentrate.
- Will you shut the door, please?

予定の解釈ではむしろ、be going to や be -ing の形式の方が優先される。

(22) We do not use will to say what somebody has already arranged or decided to do in the future

- Ann is working next week. (not Ann will work)
- Are you going to watch television tonight? (not Will you watch) (Murphy (2009 : 42))

be going to と be -ing の間にも微妙な違いがある。

(23) I am doing and I am going to do

We use I am doing (present continuous) when we say what we have arranged to do - for example arranged to meet somebody, arranged to go somewhere:

- What time are you meeting Amanda tonight?
- I'm leaving tomorrow. I already have my plane ticket.

I am going to do something = I've decided to do it (but perhaps not arranged to do it):

- "The windows are dirty." "Yes, I know. I'm going to wash them later."
- (= I've decided to wash them, but I haven't arranged to

wash them)

- ・ I've decided not to stay here any longer. Tomorrow I'm going to look for another place to live.

Often the difference is very small and either form is possible. (Murphy (2009 : 38))

述部が指示する行為を行うことが決まっていれば、be going to が、さらに、それを行うための手配が行われていれば be -ing が好まれる。(be -ing は学校文法の参考書等では「近未来」といった説明がなされているが、「近未来」がどこまでを指すのか不明であることを踏まえれば、Murphy (2009) の説明が、少なくとも補助的に、教育現場に還元されることが期待される。)

「習慣」に対してどのような和訳をつけるかが難しいという問題はあるが、「私はテニスをします」という訳をつけるにしても、それが習慣よりもむしろ未来を想起させることに注意は必要である。単純現在形が習慣を表すという説明は学校文法書にも散見されるのだが、その訳が「～する」である限り、訳だけで単純現在形の習慣的解釈を理解することは容易でない。

4.2. 対比を通じた「習慣」的アスペクトの明確化

「習慣」を過不足なく簡明に表す和訳が難しいとすれば、対比によって「習慣」の意味するところを浮き彫りにすることが次善の策の一つとなろう。この点においては、Murphy (2009) が示唆的である。本節においては、Murphy (2009) を概観しながら、「習慣」的解釈を本質的に理解する対比について考察する。

4.2.1. 過去形との対比

現在形との対比で直感的にまず浮かぶのは過去形であろう。しかし、現在形を「～する」という訳に一概に結び付けることが危険であるように、現在形と過去形を文字通りに単純に対比させるのも、(形態としてはやむを得ないものの) 解釈の観点からは危険がある。過去形は現在形と違い、過去の習慣ではなく、過去の事実を表すが一般的である。

(24) I played tennis (yesterday).

(24) は「昨日テニスをした」という一事実を述べている。Murphy (2009 : 34) は used to が現在形と対比されるべきであることを明示的に述べている。

(25) Something used to happen = it happened regularly in the past but no longer happens:

• I used to play tennis a lot, but I don't play very often now. (Murphy (2009 : 34))

(26) "I used to do something" is past. There is no present form. You cannot say "I use to do." To talk about the present, use the simple present (I do). Compare:

Past	he used to play	we used to live	there used to be
Present	he plays	we live	there is

- We used to live in a small town, but now we live in Chicago.
- There used to be four movie theaters in town. Now

there is only one. (Murphy (2009 : 34))

動詞の屈折変化を覚えることは不可欠であり、その中で、現在形と過去形を対比させることも必要である。「～する」という訳を刷り込むことも学習の初期段階としてはやむを得ないであろう。しかし、単純現在形と単純過去形がアスペクト的に一概対比できないことをいつまでも指導しないでいいはずはない。むしろ、このようなアスペクト的相違を説明するにあたって、(26) に示したような used to との対比が本質的理解に繋がると思われる。

4.2.2. 進行形との対比：「現在」と「今」

現在形が表す現在は状態動詞を除き一般に「習慣」である。しかし、「現在」とは何かと問われた学生の多くが直感的には「今」と答える。もっとも、「今」が必ずしも「習慣」を表す訳ではないことも分かっているので、「現在（習慣）」と「今」を比較することが重要になる。「現在」と対比すべき「今」を表すのは何か。言うまでもなく現在進行形である。Murphy (2009) の "Present and Past" と題した Unit 1 から Unit 6 構成はこのようなアイデアを具現しているといえる。

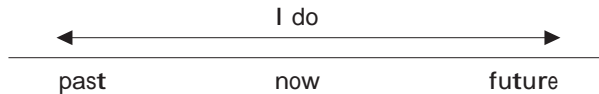
(27) Present and Past

1. Present Continuous (I am doing)
2. Simple Present (I do)
3. Present Continuous and Simple Present 1
(I am doing and I do)
4. Present Continuous and Simple Present 2
(I am doing and I do)

own. (Murphy (2009 : 6))

(29) Simple present (I do)

We use the simple for things in general or things that happen repeatedly.



• Water boils at 100 degrees Celsius.

⋮

We use the simple present for permanent situations:

• My parents live in Vancouver. They have lived there all their lives. (Murphy (2009 : 6))

(28)、(29) が示すように、進行形と比較することによって、現在形が習慣を表すことがより明確に認識できる。(29) において、現在形の時間的指示が過去にも伸びていることにも注目したい。1 節で述べたように現在完了の have が過去も含意できることは (29) の図からも支持される。現在形のアスペクト的解釈を定着させることによって、現在完了形のアスペクト性への認識も深まることが期待できる。

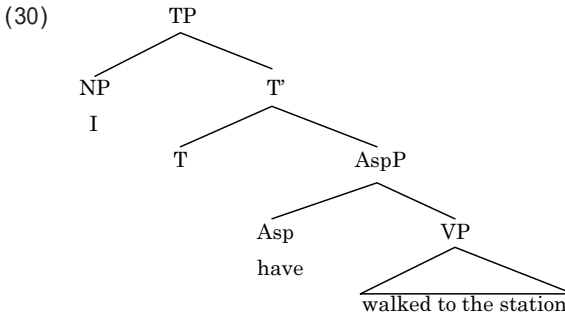
本節においては、単純現在形の文法的アスペクトともいうべき「習慣」の意味を、現在形に対して学生が陥りやすい誤解を排しつつ、どのように指導すべきか考察した。「習慣」の解釈を訳を通して浸透させることが困難であるとしたら、対比を通じて丁寧に説明することが必要であろう。その点で Murphy (2009) は、用いている対比そのものも、(27) に示したような展開にしても示唆に富んでいる。その示唆の根本は形態の体系と意味の体系を分けてそれ

それぞれ独立的に考察している点にある。形態の体系と意味の体系をそれぞれ正確に理解した上で、それぞれの体系の対応関係を考える、それこそ真に、時制全体の体系的理解を進めるものと言えよう。

5. アスペクトの合成と統語構造

本稿においては、語彙的アスペクトと文法的アスペクトが合成されて文全体のアスペクト性が決定されること観察した。本稿を終える前に、アスペクトの合成と統語構造の関係について概観したい。

生成文法においては命題内容を表す動詞句 (Verb Phrase (VP)) と文法機能に相当する範疇 (機能範疇) を別個に設定し、それらが階層構造を成すと考えている。((28) において NP は名詞句 (Noun Phrase)、VP は動詞句 (Verb Phrase) を表す)



AspP は完了形や進行形などの文法的アスペクトを表す助動詞を主要部 (Asp) とする範疇であり、TP は時制要素 (助動詞や「現在」、「過去」を表す屈折語尾) を主要部 (T) とする範疇である。(30) の構造は本動詞の解釈を機能範疇が表す機能的解釈が限定する構造に

なっており、本稿で観察してきた語彙的アスペクトに文法的アスペクトが合成される仕組みをそのまま表現しているといえる。さらに、各主要部に具現した顕在的要素を垂直に下方に移動し、線形的に並べれば、語順も予測可能である。もちろん、(30) のような構造を教育現場で使用する必要はないが、指導者として、語彙的アスペクト、文法的アスペクト、テンスの機能上の役割分担と、統語構造や語順の関係を体系的に理解するために活用したい。このような構造の有効性は AspP の内部構造を詳しく考えた場合も同様である。Murphy (2009 : 20) の次の説明について考えてみよう。

(31) It has been raining.

Study this example situation:

Is it raining?

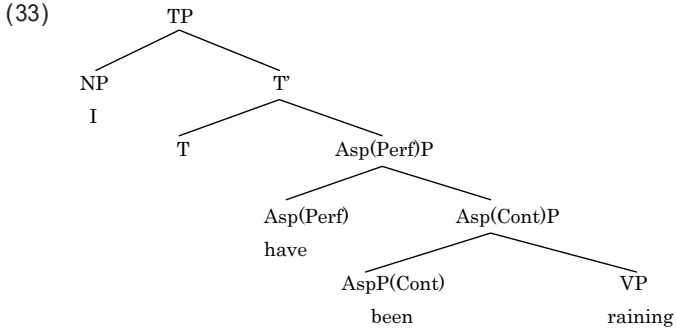
No, but the ground is wet.

It has been raining.

Have/has been -ing is the present perfect continuous:

(32) We use the present perfect continuous for an activity that has recently stopped or just stopped. There is a connection with now :

現在進行形が今まさに起こっている事象を描写する ((28) も参照) のに対し、現在完了進行形においては、それが表す事象が現在との関わりを持っていることこそ示唆するものの、今まさに起こっている必要はない。つまり、完了の have は進行形の解釈を限定するのだが、この意味上の関係と語順上の関係は (30) の AspP を細分化した (33) によって捉えることができる。



(33) においては完了形の have が進行形の been より構造上上位であって、構成素統御と呼ばれる関係を形成している。

(34) 構成素統御

A を支配する最初の枝分かれ節点が、B も支配する時、A は B を構成素統御する。

完了形の have (Asp (perf)) を支配する最初の枝分かれ節点 (Asp (Perf) P) が進行形の be (Asp (Cont)) を支配しているので、have は be を構成素統御している。構成素統御は副詞などの意味の作用域や代名詞の指示などにも利用される概念であり、構成素統御する要素がされる要素を意味的に限定する関係を意味している。そして、構成素統御する要素はされる要素より必ず先行する（右方向に階層が積み上がる場合は逆）ことになるので、意味の限定関係と語順関係の橋渡し役を果たすことになる。(32) の構造並びに構成素統御という概念によって、完了形の have が進行形の意味を限定し、また語順上 have が be に先行するということが正しく予測される。

(30) や (33) の構造は、アスペクトがテンスと同様に、文構造上独立した地位と内部体系を有していることを明示している。このような理解の下で、形態の暗記に留まらないアスペクトの本質的理解深める指導を推し進めたい。

6. おわりに

本稿においては、教育現場において本動詞の語彙的アスペクト性を認識させる必要性、語彙的アスペクトとテンスや文法的アスペクトの関係を体系的に認識させる必要性を示唆し、さらに、それらを指導する方策について考察した。その難易度を推し量ると、本稿で扱った内容は中学校での指導には難しいと思われるが、高校生の知的興味として（理系でさらに複雑な体系を学んでいることを踏まえれば）必ずしも難しいレベルではなからうし、「難しい」という理由だけで排除すべき話でもないと思われる。英作文に際して現在完了形や進行形などのアスペクト表現の使用に自信を持ってない学生は少なくない。屈折変化や文法的アスペクトの形態的特徴が身についた段階で、アスペクト性をある程度体系的に学ばせることは有為であり、何よりもまず教師として理解を深めておく必要があると思われる。

参考文献

- 荒木一雄・小野経男・中野弘三 (1977) 『助動詞』、研究社、東京。
 田中茂範 (2015) 「「過去形」と「現在完了形」と「過去完了形」の違いが分かる、『英語教育』第 64 巻第 7 号 (10 月号)、大修館書店、東京。
 西山園雄 (2002) 「アスペクト」、中村捷・金子義明 (編) 『英語の主要構文』: 31-40、研究社、東京。
 三原健一 (1997) 「動詞のアスペクト構造」、中右実 (編) 『日英語比較選

書7: ヴォイスとアスペクト』、研究社、東京。

三原健一 (2004) 『アスペクト解釈と統語現象』、松柏社、東京。

Murphy, Raymond (2009) *Grammar in Use: Intermediate*, Cambridge University Press, Cambridge.

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press.